



TITLE:

英国における日本庭園の変遷の過程と特徴に関する研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

熊倉, 早苗

CITATION:

熊倉, 早苗. 英国における日本庭園の変遷の過程と特徴に関する研究. 京都大学, 2021, 博士(農学)

ISSUE DATE:

2021-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k23529>

RIGHT:

許諾条件により本文は2022-04-01に公開

(続紙 1)

京都大学	博士 (農 学)	氏名	熊倉 早苗
論文題目	英国における日本庭園の変遷の過程と特徴に関する研究		
(論文内容の要旨)			
<p>19世紀後半以降、日本庭園は日本を代表する文化の一つとして欧米を中心とする地域に作庭されるようになった。日本庭園の作庭は現在も世界各地を対象を広げて文化交流の象徴として継続されているが、その維持管理が重要な課題となっている。この課題を解決するためには、日本庭園それぞれが存在する国や地域の歴史的背景や文化的価値を理解するための調査が重要である。適切な管理が行われない庭園は消滅する恐れもあり、日本庭園のリストの作成と存続方法の検討、日本側からの現地管理者に向けた指導が必要であり、国土交通省はその事業を重要な国家事業の一つに位置付けている。そのため、外国の日本庭園の維持管理の方向性を考察し、議論することは不可欠になっている。</p> <p>本論文は、諸外国の中でも独特の日本庭園の定着過程が認められる英国における日本庭園の変遷の過程と特徴について、文献調査による日本庭園文化の英国文化との融合と歴史的変遷の解析、アンケート調査に基づく日本庭園観の日英間比較、および英国に現存する日本庭園についての文献調査と現地調査による現状と作庭時期ごとの特徴の解析を行い、これらに基づいて、英国の日本庭園の存続方法に関する検討と提案を行うことを目的としたものである。</p> <p>第1章では、序論として、既往研究を網羅的に検討し、諸外国の日本庭園作庭の歴史と現況を概観している。さらに、英国における19世紀のプラントハンターによる植物を通じた日英の文化交流を整理し、英国における日本庭園の歴史的特徴に及ぼした影響について検討している。以上を踏まえた上で、本研究の目的と意義を示し、最後に本論文の構成について述べている。</p> <p>第2章では、19世紀に創刊された英国の四大園芸雑誌の中で、誌名を変えながらも現在まで発刊を続けている『Gardeners' Chronicle』誌について、創刊年である1841年から刊行スタイルが変更された1967年までの127年間の掲載記事すべてを対象として、日本関連のタイトルがついた記事、347件を抽出し、内容を解析している。その結果、日本に関する記事は1910年の日英博覧会以前により多く認められた。最も多かった記事は、植物に関する記事で283件であり、46件が日本庭園に関する記事であった。日本庭園に関する記事の内容を詳細に分析した結果、前述の日英博覧会を境にして記事の内容が大きく変化したことが示された。すなわち、それ以前には日本のさまざまな植物種の英国における造園利用に関する記事が中心であるのに対して、それ以降には日本文化や慣習を介して日本庭園を紹介する記事が多くなった。これは日本に関する十分で広範な情報がさまざまな媒体によって直接入手できるようになったことと関係していると考察している。</p> <p>第3章では、日本庭園に対する日英間の現在のイメージの相違を解析するために、植物および自然風景や庭園要素に関する写真を提示して、日本庭園との関係性の強さを問うアンケート調査を、英国の2団体（日本庭園に関心がある団体と日本庭園の知識はないが植物に関心がある団体）と日本の1団体（造園関係の団体）の会員を対象に行った研究について述べている。その結果、植物に関する分析では、国による差ではなく、日本庭園に関する知識の有無に起因する違いが認められることが示唆され</p>			

た。一方、自然風景や庭園要素に関する分析では、英国と日本の間に違いが認められ、文化的背景の違いによるものと考察されたことから、英国人の日本庭園空間の捉え方については、日本庭園に関する知識による違いは大きくなく、英国人特有の共通のイメージがあることが示唆された。最後に、これらの結果に基づいて、英国の日本庭園のあり方や維持管理に関する考察を試みている。

第4章では、英国内のEnglandに現存する日本庭園について、その現状と課題及び管理の在り方を考察することを目的として、文献調査によって抽出した41の日本庭園について作庭後の変遷を把握したほか、その中の12庭園について現地調査を行った結果を解析している。抽出された日本庭園に関しては、先行研究に基づいて作庭時期を1950年を境にした黎明期と近代期に分類し、現地調査結果からは各庭園の空間構造を分析している。その結果、英国の日本庭園は黎明期にはマナーハウス等の貴族階級が所有する広大な庭園内の一部に回遊式庭園として作庭されることが多く、そのモデルは日本開国時に江戸で一般的であった大名庭園の影響を受けていることを明らかにしている。一方、近代期の日本庭園には枯山水庭園が導入されるようになり、小面積の庭園も作庭されるようになったことが明らかになった。また、黎明期の古い日本庭園においては、維持管理が途絶える、あるいは一部が廃墟となる一方で、新たに近代期に作庭された日本庭園が付け加えられる例も認められ、黎明期の日本庭園維持の重要性を示唆している。

第5章では、各章で得られた結果を統合し、英国に日本庭園が根付いた過程について考察を行うほか、日本庭園の維持管理に関する方向性を検討している。その結果、英国の日本庭園を維持するために求められることとして、主に2つの視点が必要であることを見出した。それらは、現存する日本庭園の歴史的背景と文化的価値を見出すことの重要性と、現地調査に基づく適切な管理と指導の重要性である。また、その実現のためには、日本からの技術指導により現地管理者の技術を向上させることに加えて、英国の場合には日本庭園から英国人が受けてきたインスピレーションによって独自に形成された文化を尊重することが不可欠であり、そのためには日英両国の明確な役割分担を考えることが必要であることが示唆された。本論文で得られた知見は、諸外国の日本庭園の維持と継続のためには、継続的な日本からの支援が重要であると同時に、画一的ではなく各国・地域の日本庭園の特徴や歴史的背景にあわせた支援が必要であることを示しており、日本庭園の現状評価や特性を抽出する調査・研究が重要であることを示している。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入する場合は、400～1,100 wordsで作成し
審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

現在、海外には500を超える日本庭園が存在するとされる。これらの多くは国際交流のシンボルとして作庭されたものであり、文化交流の場として活用されている。しかし、作庭後の維持管理については十分ではない場合が多く、国土交通省はこれらの庭園の再生に向けた活動を展開しているところである。一方、19世紀末から作庭されてきた初期の日本庭園は、交流の場であると同時に日本文化紹介の場としても機能してきた。特に英国は当時欧州で流行していた英国風景式の庭園様式の存在も相まって、当地の庭園文化に日本文化としての日本庭園が根付き、独自の発展を遂げた国である。本論文は、英国における日本庭園について、その歴史的背景や社会的状況を踏まえた上で現況を把握し、英国における日本庭園継承の方向性を考察することを目的として行われたものである。本論文の評価すべき点としては以下の3点が挙げられる。

1. 英国の園芸雑誌の一つで最も長い歴史を持つ『Gardeners' Chronicle』誌に注目し、127年間の記事に認められる日本および日本庭園に関する記事を抽出し、内容について解析した結果、英国の日本庭園に対する興味は、1910年の日英博覧会を境に日本の植物や文化を中心とした伝聞的興味から、さまざまな媒体に基づくより具体的な日本庭園に対する興味に変化したことを明らかにした。
2. 日英両国の3つの団体を対象とした写真を主とするアンケート調査を行い、両国人の日本庭園に関係の深い植物及び自然風景や庭園要素に対する感性の違いを解析した結果、植物に関しては国ではなく、日本庭園に関する知識の有無による違いが認められるのに対して、自然風景や庭園要素に関しては国による違いが認められ、英国には日本庭園に対して特有の感性が存在することを明確にした。
3. 先行研究によって指摘されている英国の日本庭園における時代的な違いについて、文献調査と現地調査によって詳細な検討を行い、20世紀中頃以前には大名庭園の影響を受けた回遊式庭園が広大な敷地の一部に作庭されてきたのに対して、以降の庭園は小面積のものが多く、枯山水庭園が特徴になることを明らかにした。

以上のように、本論文は英国における日本庭園の変遷の過程と特徴について歴史的背景や文化も考察した上でさまざまな観点から分析を行い、現存する日本庭園の価値や特徴を明らかにし、その継続性や現地にあわせた維持管理の必要性に言及し、英国のみならず諸外国の日本庭園の今後のあり方を示すことに成功していることから、造園学、庭園史論、環境デザイン学、日英文化比較論の発展に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士(農学)の学位論文として価値あるものと認める。

なお、令和3年7月15日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士(農学)の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。

注) 論文内容の要旨、審査の結果の要旨及び学位論文は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。

ただし、特許申請、雑誌掲載等の関係により、要旨を学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降 (学位授与日から3ヶ月以内)